

作成日 2013/4/7

表題：平成25年度 講道館（審判）講習会

日時：平成25年4月7日 9:00～16:00

場所：福井県立 武道館 午前 会議室／午後 大道場

講師 山崎 立実 先生(全日本柔道連盟審判委員会副委員長)

出席者：福井県柔道連盟 A/B 審判員ライセンス保持者及び C ライセンス受講者

講習会内容

1. ルール改正に関しての背景に関して

レスリングが2020年オリンピックで実施される「中核競技」から除外された事が話題となっています。IJF（国際柔道連盟）は、「嘉納治五郎は、教育システムとしての柔道をめざし、1882年に柔道を創始した。今日における我々の使命は、彼の意思を引き継ぐことである。競技性が重要視されるなか、柔道はサバイバルの渦中にある。さらに、オリンピック競技として、規律を内在している柔道という競技のアピールに注意を払わなければならない。」と考えている。オリンピック競技としてボクシング・テコンドー・レスリング等の格技と比較して評価される中で、違いを明確にし、初めての人が見てもわかりやすい勝敗の決し方、正しく組んで1本を取る柔道を目指してIJFは色々のルール改正を行っている。

2. コーチの振る舞いに関して

北京オリンピックにおいて、一部のコーチの不適切な行動が世界に配信されたのを機にIJFでは柔道本来の姿である選手が自立して試合し、且つ柔道の審判が誇りを持って審判が出来る様にコーチの言動（振る舞い）に関して制限をかける様に検討されてきました。

3. 新ルールに関して

今年に入りこのたび提案されたテストトライアルを適用した試合が世界中で行われている。今年5月に福岡で開催される全日本選抜柔道大会は、テストトライアル方式を適用するリオデジャネイロ世界選手権の予選であるので、全柔連ではこの試合においてテストトライアル方式を適用することを決定した。リオデジャネイロ世界選手権においてテストトライアルが実施されたのち検討され新ルール改定が決定される。新ルールに対する種々の質問は、新ルール決定発表の後に福井県柔道連盟として纏めて全柔連の審判委員会に質問をする事と成った。

4. 審判講習会実技指導

午前の部（9:00～12:00）

- ・ 審判を行う上で、「技の評価」は大変重要である。
- ・ 投技において両膝が付いても直ぐに寝姿勢と考えない。
- ・ 場内から場外に施した技に関して、一連の技の流れをみる、注意するのは技を仕掛けた方が場外で返されても技の効果を取ることである。
- ・ 捨身技・返し技で同体のように倒れた時、スコアを与える場合開始のテープを指さす。
- ・ ブリッジを推奨しないために「一本」または相応のスコアを与える。
- ・ 試合終了の合図と同時に施された技はスコアとなる。微妙な時は時計係への確認と合議が必要。（正式な大会では、時計係などの競技役員は21歳以上で3年以上の審判経験がある人が行うので、その場合は、時計係も責任を持って時間内かを判断する。ただし、ローカルの試合の場合はその都度判断する。）
- ・ 横三角からの抑え込みは、臀部が畳に着地していないこと。
- ・ 寝技に関しては、進展（攻防）を理解し判断する事、安易に「待て」をかけないこと。ただし、ポイントを取った後の時間稼ぎの偽造的な(攻撃の意図が無い)内容は審判が判断して「待て」をかける。
- ・ 反則の適用について。罰則を与えるタイミングを見極める事、時間だけで反則を取らないようにする事、偽装攻撃（掛け逃げ）に関して、日本人は甘いので、早めに指導を取る。
- ・ 国際審判規定においては攻撃しないで標準的でない組み方をすると5秒で指導となるので、攻撃しているかを見極める。
- ・ 片襟とクロスグリップに関して、片襟に関しては、5秒、クロスグリップに関しては直ぐに技をかけなければ、指導を与える。（とくに少年では片手の柔道は推奨しないので、両手で組む柔道を指導する様にして欲しい。）
- ・ ピistolグリップ/袖口に関して、技を仕掛ける為に一瞬その形になった場合は技の効果を認める。（ただし、ピistolグリップ/袖口その物が認められたわけではない）
- ・ 1回目の指導に関しては、出来るだけ早く与えることが、結果として試合者の為になる。
- ・ 少年規定の寝技で、審判員は危険と判断したら「待て」をかける事に成っている。そうすると少年の指導者の中で、生徒に危険で無くても、痛いと言うよう指導する指導者が生じるとの意見があるが、柔道で一番大切なのは、柔道を通じて正しい行いを教育する事が重要であり、指導者が生徒に何を伝えたいかを重視すべきである。
- ・ 試合者がケガによる遅延行為を行う場合は、医者と呼ぶかを速やかに選手に確認する。ただし、子供の試合に関しては、選手(子供)が「棄権負け」になることを理解していない可能性があるため、トラブルを避けるためにコーチにも確認する等の配慮を行う。（試合前の申し合わせ事項で確認しても良い）

午後の部（13:00～16:00）

- ・副審の時、自分しか見えない反則があった場合にその副審は立つ。主審が見えない可能性があるため、それを見たら、反対の副審も立ってアピールする。
- ・反則の訂正に関して、罰則を与える時は、罰則に対する理由を簡単な動作で示すが、その罰則を両副審が取り消した場合は、罰則に対する簡単な動作で示さずに（指導の形）握りこぶしから人差し指を伸ばして選手を指差し、反対の手で取り消す。
- ・反則（指導）が3回累積した場合、総合勝ちがあり得る事の心の準備をする。
- ・場外際の判定の合議の場合、場内か場外かと合わせてどちらのスコアか、技の効果も確認すると良い。
- ・相手を投げた後、寝技の形になっていたとき。投げの効果が1本⇒技有りに訂正された場合、主審／副審が合議して出来るだけ元の形(投げた後の寝姿勢)に戻して再開する。
- ・「待て」は、ジェスチャーは時計が分かる様に時計係に、声は選手に分かる様に選手に向かって発声する。
- ・「待て」のあとの「はじめ」に関して、選手が同等の位置に立った場合は試合再開を行う。
- ・主審の立ち位置に関して、副審にかぶらない様に対角線上で動く、試合の流れで追い込まれて、場外に出ない様にする。（自然に歩くように意識し、立ち止まらない様に注意する。）ただし、抑え込み等にかんして、確認が必要な場合は場外に出て確認しても良い。
- ・現在国内では先に呼ばれた方が赤（青）に成っているが、2011年6月より、国際大会では、先に呼んだ方を白とすることに変更された。（ただし、国内ルールは今まで通り、赤（青）を先とする）
- ・ロンドンオリンピックでは開始線が廃止されていた。（ただし、国内ルールでは廃止しない）
- ・指導のジェスチャーに関して、国際ルールで決まっているのは、消極的、偽装攻撃、足取りのみ、その他のジェスチャーに関しては、選手に分かるジェスチャーで行う。（場外指導は場外際（ボーダー）を指して、指導をとる。その他は、適時現行使用されているジェスチャーで行う。）
- ・少年大会等は、ジェスチャーだけではなく、口頭で指導の内容を説明しても良い。（国際審判規定では、グレードに応じて口頭で説明しても良いと成っている）
- ・クロスグリップの場合は足取をしても良い。
- ・審判の礼の作法、頭を30度にさげ、2秒キープする。
- ・反則のジェスチャーは試合者に向かって分かる様に指さしする。
- ・合議する場合、主審は試合者が視野に入る様に立ち位置に気を付ける。
- ・嘔吐の場合、合議の上、それまでと宣告しその後、相手に「棄権勝ち」を与える。
- ・主審が試合後（「それまで」の後）宣告するのは、「引き分け」「総合勝ち」「棄権勝ち」。（反則負けの場合は、「反則負け」とコールし、その後「それまで」と宣言し、勝者側に手を上げる）
- ・場外間際の際どい技（グレーな判断）は、技のポイントを取る。

(指導者は、選手に対し「待て」がかかるまでは攻め続けるよう指導してほしい。)

Q&A

質問

僅差判定に関して、赤積極的な攻撃をしており、白は効果相当の技を取っているが、積極的な攻撃をしていない場合の判定基準を教えてください。

回答

基本は、白が指導を取るほどの逃げ方をしていない場合は、白の投げ技のポイントを取る。

以上